

み こと 言 ば 葉 の れい 礼 はい 拝



日本聖公会

「み言葉の礼拝」について

—— 使用上の一般指針 ——

1. 主日、あるいは祝日に司祭が不在であっても、会衆が聖書のみ言葉を中心に共に祈り、感謝と賛美の豊かな礼拝を献げることができることを意図して、この式文は作成されました。したがって司式者は執事あるいは信徒の奉仕者であることが前提となっています。
2. み言葉（聖書朗読）を中心としている点は「朝の礼拝」「夕の礼拝」と同様ですが、とくに主日に他教会と共に、その日の福音書を、旧約聖書朗読、使徒書朗読と合わせて味わい黙想できるように、また代祷が重視され、世界のため、全教会のために祈ることによって、「キリストの祭司職にあずかる者」（洗礼式文より）となることが意図されています。
3. 司式者の位置は、「朝・夕の礼拝」の司式者の位置が一般的です。また聖書のみ言葉を中心とした礼拝ですので、聖書朗読台をはっきりと会衆の中央に据えることも一つの方法です。いずれにしてもこの式文の使用と、実際上の事柄については、教区主教、当該教会牧師の指導と、十分な打ち合わせのもとに行ってください。
4. 「第1朗読」（旧約聖書、あるいはそれに代る書）、第2朗読（使徒書）、および福音書の三つの朗読と詩編は日本聖公会祈祷書の「聖餐式聖書日課（A年、B年、C年）」に従います。この式文では「第1朗読」「第2朗読」という言葉を用い、着席してこれを聞きます。「福音書」は、主の福音に敬意を表して起立します。
また、福音書朗読者が執事である場合には、祈祷書166ページの福音書朗読前後の唱和を用いることができます。

5. 現行祈祷書と同様に、旧約聖書と詩編はそれぞれ「朗読し（唱え）てもよい」としましたが、この礼拝式は「み言葉」を中心としていますので、可能な限りは三つの朗読と詩編を用いることがふさわしいと思います。
6. み言葉の分かち合いは、福音書の後で行うほか、礼拝後に引き続いて行うこともできるでしょう。教区主教、当該教会牧師と打ち合わせて行ってください。
7. 聖餐式ではありませんが、会衆の行動的な礼拝参加と交わりを重視して、「平和の挨拶」が用いられ、また礼拝の最後は「派遣」によって結ばれます。
8. 式文1頁の〔Ⅱ〕、「そして、光があった」「言は、神であった」「その方によって、わたしたちが生きるようになるためである」の三つの応答の際に、それぞれ
＜聖卓にろうそくを置く（あるいは灯す）＞
＜聖卓上に聖書を置く＞
＜聖卓中央に十字架を置く＞等の
象徴的行為を行うことも可能です。やはり教区主教、当該教会牧師との打ち合わせによってご判断ください。
9. その他は式文中の指示に従ってください。
10. 礼拝日誌、統計表においては「主日早（晩）祷」、「主日の朝（夕）の礼拝」として扱ってください。

ことば れいはい み言葉の礼拝

主日またはその他の祝日に聖餐式が行われない場合、朝の礼拝または夕の礼拝に代えて用いることができる。

ここで聖歌を用いてもよい。

つど ともに集う

次の〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕のうちの一つ、または両方を用いる。

〔Ⅰ〕

一同立つ。

司式者 ちち かみ しゅ 父なる神と主イエス・キリストからのめぐ へいわ みな
さんとともに

会衆 また、あなたとともに

または

司式者 しゅ ひかり へいわ みな 主イエス・キリストの光と平和が、皆さんとともに

会衆 また、あなたとともに

〔Ⅱ〕

一同立つ。それぞれの唱和の後、沈黙の時をおいてもよい。

司式者 はじ せ かい やみ 初めに、世界が闇であったとき、かみ い 神は言われた。

ひかり
「光あれ」

会衆 そして、ひかり 光があつた

(創 1:1-3)

司式者 ^{はじ}初めに、^{しず}静けさの中で、^{なか}言は神とともにあった

会衆 ^{ことば}言は、^{かみ}神であった (ヨハネ 1:1)

司式者 ^{かみ}神は、その^{ひと}独り子^ごを世^よにお遣わし^{つか}になった

会衆 ^{かた}その方^いによって、わたしたちが生^いきるようになるため
である (Iヨハネ 4:9)

悔い改めの祈り

勧めの言葉は次の〔I〕、〔II〕のうちの一つを用いる。

〔I〕

司式者 ^{かみ}神のみ^{まえ}前にひざまずいて、^{みづか}自らを^{かえり}省み、ともに^{つみ}罪の^{ゆる}赦
しを^{いの}祈りましょう

〔II〕

司式者 ^{かみ}神はその^{ひと}独り子^ごをお^{あた}与えになったほどに、^よ世を^{あい}愛して
くださいました。この^{かみ}神の^{あい}愛に^{こた}応えるため、^{みづか}自らを^{かえり}省
み、ともに^{つみ}罪の^{ゆる}赦しを^{いの}祈りましょう

ここで一同ひざまずく。共同懺悔 (295 ページ) を用いるときは、
ここです。しばらく自らを省みた後、一同で唱える。

一同 ^{あわ}憐れみ^{ふか}深い^{かみ}神よ、わたしたちは、してはならないこと
をし、しなければならぬことをせず、^{おも}思いと、^{ことば}言葉と、
^{おこな}行いによって、あなたと^{とな}隣り人^{びと}に対して^{たい}多く^{おお}の罪^{つみ}を^{おか}犯

しています。どうか罪^{つみぶか}深いわたしたちをお赦^{ゆる}してください。
い。新^{あたら}しい命^{いのち}に歩^{あゆ}み、み心^{こころ}に従^{したが}い、み栄^{さか}えを現^{あらわ}す
ことができますように、救^{すく}い主^{ぬし}イエス・キリストによ
って^{ねが}お願いいたします アーメン

一同立つ。ここで聖歌を用いてもよい。式の初めに聖歌を用いたときは、ここで聖歌は用いない。

続いて次の〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕、〔Ⅳ〕のうちの一つを歌いましたは唱える。

〔Ⅰ〕

詩編第95編 (1-7 節)

- 1 主^しに向^{へん}って喜^しび歌^{うた}い || 救^{すく}いの岩^{いわ}に声^{こえ}を上げよう
 - 2 感^{かん}謝^{しゃ}に満^みちてみ前^{まえ}に進^{すす}み || 賛^{さん}美^びの歌^{うた}で神^{かみ}をたたえよう
 - 3 主^{しゅ}は偉^い大^{だい}な神^{かみ} || すべての神^{かみ}にまさる王^{おう}
 - 4 地^ちの深^{ふか}みは主^{しゅ}のみ手^てに || 山^{やま}の頂^{いただき}もまた主^{しゅ}のもの
 - 5 海^{うみ}は神^{かみ}のもの、主^{しゅ}はこれを造^{つく}られた || 乾^{かわ}いた地^ちも主^{しゅ}は造^{つく}られた
 - 6 身^みを低^{ひく}くして伏^ふし拜^{おが}み || 造^{つく}り主^{ぬし}、主^{しゅ}のみ前^{まえ}にひざまずこう
 - 7 主^{しゅ}はわたしたちの神^{かみ}、わたしたちは神^{かみ}の民^{たみ} || わたしたちはその牧^{まき}場^ばの民^{たみ}、そのみ手^ての羊^{ひつじ}
- 栄^{えい}光^{こう}は || 父^{ちち}と子^こと聖^{せい}霊^{れい}に
- 初^{はじ}めのように、今^{いま}も || 世^よ々に限^{かぎ}りなく アーメン

〔Ⅱ〕

各節を3回ずつ繰り返してもよい。

しゅ あわ あた
主よ、憐れみをお与えください

あわ あた
キリストよ、憐れみをお与えください

しゅ あわ あた
主よ、憐れみをお与えください

または

キリエ・エレイソン

キリストエ・エレイソン

キリエ・エレイソン

〔Ⅲ〕

この賛歌は主日およびその他の祝日に、一同で歌いまたは唱える。

ただし、降臨節および大斎節の主日には用いない。

だいいいこう うた 大栄光の歌

たか かみ えいこう ち ところ ひと へい
いと高きところには神に栄光、地にはみ心 にかなう人びとに平
わ
和がありますように。

ぜんのう ちち てん おう しゅ かみ しゅ おが しゅ かんしゃ しゅ えい
全能の父、天の王、主なる神よ、主を拝み、主に感謝し、主の栄
こう
光をほめたたえます。

ちち ひと ご しゅ よ つみ のぞ かみ こひつじ しゅ
父の独り子・主イエス・キリスト、世の罪を除く神の小羊・主な
る神よ、わたしたちに憐れみをお与えください。父の右に座し
ておられる主よ、わたしたちのいの 祈りを 受け入れてください。

しゅ せい しゅ おう しゅ せいれい
イエス・キリストよ、主のみ聖、主のみ王、主のみ聖霊とともに

に、父なる神の栄光のうちに、最も高くおられます アーメン

[IV]

司式者 この世界とわたしたちをお造りになった方をほめたたえましょう

会衆 父なる神よ、あなたのみわざを賛美します

司式者 わたしたちに新しい命を与えてくださった方をほめたたえましょう

会衆 み子イエス・キリストよ、あなたの愛に感謝します

司式者 わたしたちを清め導いてくださる方をほめたたえましょう

会衆 聖霊なる神よ、常にあなたのみ助けを喜びうたいます

特 禱

司式者 主は皆さんとともに

会衆 また、あなたとともに

司式者 祈りましょう

ここで当日の特禱を用いる。

ともに聞く

執事 聖書のみ言葉を聞きましょう

会衆は着席する。

第1朗読

朗読者または執事は第1の聖書日課を朗読してもよい。朗読の前に「第1の朗読は——書第一章一節から」と言い、朗読後「第1の朗読を終わります」と言う。執事は第1朗読、第2朗読、福音書の後に「いま聞いたみ言葉について黙想しましょう」と言って黙想の時間をおいてもよい。

詩編

第1朗読に引き続いて定められた詩編を歌いまたは唱えてもよい。栄光の歌は用いない。

第2朗読

朗読者または執事は第2の聖書日課を朗読する。朗読の前後は、第1朗読にならう。

次に一同立つ。ここで聖歌を用いてもよい。復活日から8日間は復活の歌を用いてもよい。

福音書

朗読者または司式者は福音書を朗読する。朗読の前に「——による福音書第一章一節から」と言い、朗読後、「——による福音書を終わります」と言う。

朗読者が執事の場合には、以下の福音書朗読前後の唱和（祈祷書166ページ）を用いることができる。

朗読者 主は皆さんとともに
会衆 また、あなたとともに

朗読者 聖——による福音書第——章——節以下に記された主
イエス・キリストの福音。主に栄光

会衆 主に栄光がありますように

福音の朗読が終わったとき、次のように歌いまたは唱える。

朗読者 主に感謝

会衆 主に感謝します

*み言葉の分かち合い

勧話または説教をする。

あるいは勧話または説教にかえて、当日のみ言葉を分かち合ってもよい。

使徒信經

一同立って、次のうちの一つを歌いまたは唱える。

〔I〕

わたしは、天地の造り主、全能の父である神を信じます。

また、その独り子、わたしたちの主イエス・キリストを信じます。主は聖霊によって宿り、おとめマリヤから生まれ、ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、よみに降り、三日目に死人のうちからよみがえり、天に昇られました。そして全能の父である神の右に座しておられます。そこから主は生きている人と死んだ人とを審くために来

られます。

また、^{せいれい しん}聖霊を信じます。^{せい こうかい}聖なる公会、^{せい と まじ}聖徒の交わり、^{つみ ゆる}罪の赦し、

^{からだ}体のよみがえり、^{えいえん いのち しん}永遠の命を信じます アーメン

〔Ⅱ〕

司式者 わたしは、^{てん ち つく めし}天地の造り主、

会衆 ^{ぜんのう ちち かみ しん}全能の父である神を信じます。

司式者 また、その^{ひと こ}独り子、

会衆 わたしたちの^{しゅ しん}主イエス・キリストを信じます。

司式者 ^{しゅ せいれい やど}主は聖霊によって宿り、

会衆 おとめマリヤから^う生まれ、

司式者 ポンテオ・ピラトのもとで^{くる う}苦しみを受け、

会衆 ^{じゅうじ か}十字架につけられ、

司式者 ^{し ほうむ}死んで葬られ、

会衆 よみに^{くだ}降り、

司式者 ^{みつ か め しにん}三日目に死人のうちからよみがえり、

会衆 ^{てん のぼ}天に昇られました。

司式者 そして^{ぜんのう ちち かみ みぎ ざ}全能の父である神の右に座しておられます。

会衆 ^{しゅ い ひと し ひと さば}そこから主は生きている人と死んだ人とを審くために
^こ来られます。

司式者 また、^{せいれい しん}聖霊を信じます。

会衆 ^{せい こうかい せいと まじ} 聖なる公会、聖徒の交わり、
司式者 ^{つみ ゆる からだ} 罪の赦し、体 のよみがえり、
会衆 ^{えいえん いのち しん} 永遠の命 を信じます
一 同 **アーメン**

「平和の挨拶」は「派遣の唱和」の前に用いてもよい。

^{へいわ あいさつ}
平和の挨拶

次の〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕のうちの一つを用いる。

〔Ⅰ〕

司式者 ^{しゅ へいわ みな} 主の平和が皆さんとともに
会衆 **また、あなたとともに**
司式者 ^{へいわ あいさつ か} 平和の挨拶を交わしましょう

ここで、互いに「主の平和」と唱えて挨拶を交わす。

〔Ⅱ〕

司式者 ^{へいわ} キリストはわたしたちの平和です
会衆 ^{しゅ な であ しゅ へいわ わ} わたしたちは主のみ名によって出会い、主の平和を分
^あ
かち合います
司式者 ^{へいわ あいさつ か} 平和の挨拶を交わしましょう

ここで、互いに「主の平和」と唱えて挨拶を交わす。

ささ 献げもの

ここで次の言葉を用いてもよい。あるいは他のふさわしい言葉が聖句を用いてもよい。

司式者 ^{しゅ} 主の ^{すく} 救いの ^{わざ} み業に ^{かんじや} 感謝し、 ^{さんび} ともに ^{ささ} 賛美を ^{ささ} 献げましょう

信施はここで集める。その間に聖歌を用いてもよい。

信施を献げるときは、以下の言葉を歌いまたは唱えてもよい。

司式者 ^{しゅ} すべての ^{たまもの} ものは ^{しゅ} 主の ^{たまもの} 賜物

一同 ^{しゅ} わたしたちは ^う 主から ^{しゅ} 受けて ^{ささ} 主に ^{ささ} 献げたのです アーメン

いの ともに 祈る

次の代祷のうちの一つを用いる。

だい 代 禱 I

司式者は次のように言う。会衆の代表者が言ってもよい。

司式者 ^{すく} 救い ^{ぬし} 主イエス・キリストの ^{ことば} み言葉と ^{わざ} み業に ^{たよ} 頼り、 ^{ぜんこうかい} 全公会
のため、 ^{せかい} また ^{いの} 世界のために ^{いの} 祈りましょう

ここで「——のために黙禱しましょう」と言って、感謝と代祷の題目をあげ、会衆に黙禱を求めてもよい。また会衆に感謝と代祷の題目を求めてもよい。黙禱に代えて適当な祈りを用いてもよい。「ことに」のあとに適当な名前をあげてもよい。

司式者 ^{かみ} 神よ、 ^{しゅ} 主の ^{こうかい} 公会（ ^{こと} ことに —— ） ^{つよ} を ^こ 強めて、 ^{わざ} み子の ^{わざ} み業を ^{おこな} 行 ^{せいしよく} わせて ^{しん} ください。 ^と すべての ^{せいしよく} 聖職 と ^{しん} 信徒（ ^{こと} ことに ^わ わ

たしたちの主しゅきょう教——)を導みちびき、み名なを呼ぶ者よを主ものの真しん
理りと愛あいのうちいっに一致ちさせ、日々主ひの栄光びしゅをこの世えいこうに現よ
す者ものとならせてください

会衆 主しゅよ、お聞ききください

各応唱の後に、しばらく黙禱してもよい。

司式者 神かみよ、すべての国くに (ことひとに——) の人ちびとに知恵えを与え
て正義せいぎと平和へいわの道みちに導みちびいてください。互たがいに尊敬そんけいする
心こころを与え、ともにすべての人ひとの幸さいわいを求めもとさせてく
ださい

会衆 主しゅよ、お聞ききください

司式者 神かみよ、わたしたちと家族かぞく、すべての友人ゆうじんと隣り人とな (こ
とひとに——) に恵みめぐを与え、ともに主あたを知り、主しゅに仕え、
互たがいに愛あいすることができるようにしてください

会衆 主しゅよ、お聞ききください

司式者 神かみよ、悩むなや人ひと、悲しむかな人ひと、病びょう気きの人ひと、貧しいまげ人ひと、その
他災たわざわいの中なかにある人ひとびと (ことかえりに——) を顧かえりみ、みか
ら
をあた与えて、勇気ゆうきと希望きぼうを増まし加くわえ、主しゅの救すくいの喜よろこびに
みちび
導みちびいてください

会衆 主しゅよ、お聞ききください

司式者 神かみよ、世よを去さったすべての人ひと (ことかえりに——) を顧かえりみ、

かれ うえ しゅ あい むね な と
彼らの上に主の愛のみ旨を成し遂げてください。わた
したちは、よ よ しゅ あかしびと あた しゅ めぐ
世々に主の証人たちに与えられた主の恵み
のゆえに、な
み名をたたえます。どうか、わたしたちも、
かれ まじ たも く に えいこう
彼らとの交わりを保ち、ともにみ国の栄光にあずから
せてください

一同 しゅ こ
主よ、これらのことをみ子イエス・キリストによって
ねが
お願いいたします アーメン

だい とう 代 禱 II

司式者は次のように言う。会衆の代表者が言ってもよい。

すく めし こと ぼ わざ たよ ぜんこうかい
司式者 救い主イエス・キリストのみ言葉とみ業に頼り、全公会
のため、またせかいのいののために祈りましょう

ここで司式者または会衆の代表者は、適当な言葉で代禱を献げる。
祈りには以下の題目を含める。それ以外のふさわしい題目を加えて
もよい。また会衆に感謝と代禱の題目を求めてもよい。なお「世
を去った人びとのため」の祈りは、最後の項目にするとよい。
各応唱の後に、しばらく黙禱してもよい。

- せ かい きょうかい きょうく
・世界の教会とわたしたちの教区のため

司式者 ……主よ、お聞きください

会衆 主よ、わたしたちの祈りを受け入れてください

- せ かい くにぐに せいぎ へいわ
・世界の国々の正義と平和のため

司式者 ……主よ、お聞きください

会衆 主よ、わたしたちの祈りを受け入れてください

・わたしたちの^{きょうかい}教会と^{ちいきしやかい}地域社会のため

司式者 ……主よ、お聞きください

会衆 主よ、わたしたちの祈りを受け入れてください

・^{くる}苦しみや^{かな}悲しみのうちにある^{ひと}人びとのため

司式者 ……主よ、お聞きください

会衆 主よ、わたしたちの祈りを受け入れてください

・^よ世を去った^{ひと}人びとのため

司式者 ……主よ、お聞きください

会衆 主よ、わたしたちの祈りを受け入れてください

代祷の最後は一同で次のように言う。

一同 ^こみ子イエス・^{ねが}キリストによって^{ねが}お願いいたします

アーメン

主^{しゅ}の祈^{いの}り

一同ひざまずく。

司式者 ^{しゅ}主よ、^{あわ}憐れみをお^{あた}与えください

会衆 ^{しゅ}キリストよ、^{あわ}憐れみをお^{あた}与えください

司式者 ^{しゅ}主よ、^{あわ}憐れみをお^{あた}与えください

次に一同、主の祈りを歌いまたは唱える。

てん ちち
天におられるわたしたちの父よ、

な せい
み名が聖とされますように。

くに き
み国が来ますように。

てん おこな ち おこな
みこころが天に行われるとおりに地にも行われますように。

ひ かて きょう あた
わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。

つみ ひと
わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします。

ゆうわく
わたしたちを誘惑におちいらせず、

あく すく
悪からお救いください。

くに ちから えいこう えいえん
国と力と栄光は、永遠にあなたのものです アーメン

かん しゃ 感 謝

司式者 ともに祈りましょう

次の〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕のうちの一つを用いる。

〔Ⅰ〕

ぜんのう かみ じ ひ ちち ゆた めぐ あた
全能の神、慈悲の父よ、わたしたちに豊かな恵みを与えてくださ

ることを感謝いたします。主はわたしたちを造り、わたしたちを

まも よ あた しゅ
守り、この世のものを与え、ことに主イエス・キリストにより世

あがな かざ あい あらわ めぐ う ほうほう しめ のち よ
を贖って限りない愛を現し、恵みを受ける方法を示し、後の世

えいこう のぞ いた
の栄光の望みを抱かせてくださいました。どうかこのもろもろの

めぐ ふか かん ことば みずか ささ しゅ つか
恵みに深く感じ、ただ言葉だけでなく、自らを献げて主に仕え、
しょうがいきよ おこな しゅ えいこう あらわ
生涯清い行いによって、主の栄光を現すことができますよう
に、主イエス・キリストによってお願いいたします。誉れと栄光
しゅ ひらが ほま えいこう
が父と子と聖霊に限りなくありますように アーメン

〔Ⅱ〕

みなもと かみ とお ほな
すべてのものの源である神よ、あなたは遠く離れていたわたし
こ で あ しゅ いえ まね
たちを、み子との出会いをとおして主の家に招いてくださいまし
た。このあなたの愛に感謝し、み名をほめたたえます。あなたか
らいいただいたみ言葉と恵みと平和を、わたしたちがすべての人び
とと分か合うことができますように。そして聖霊の導きにより、
わか あ せいれい みちび
あなたの光でこの世界を照らす働きにあずかせてください。
ひかり せ かい て ほたら
また与えられた希望を変わることなく保たせ、すべてのものがみ
あた きぼう か たも
名をほめたたえることができますように、主イエス・キリストに
な しゅ
よってお願いいたします アーメン

〔Ⅲ〕

しゅ かみ かがぎ めぐ あた
主なる神よ、わたしたちに限りない恵みを与えてくださることを
かんしや
感謝します。どうか、あなたのみ言葉の光でわたしたちの心を
ことば ひかり ところ
て みちび
照らし導いてください。わたしたちがあなたを賛美し、み言葉に
さんび ことば
したが、ともに主の愛のうちに生活することができますように。主
しゅ あい せいかつ しゅ
イエス・キリストのみ名によってお願いいたします アーメン

主しゅとともいに行いく

終わりに司式者は次のように言う。

主しゅイエス・キリストの恵めぐみ、神かみの愛あい、聖せい霊れいの交まじわりが、わたし
たちとともにありますように。アーメン (Ⅱコリント 13:13)

派遣はけんの唱しょう和わ

一同立って、次の〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕のうちの一つを用いる。

〔Ⅰ〕

司式者 ハレルヤ、主しゅとともいに行いきましょう

会衆 ハレルヤ、主しゅのみ名なによって アーメン

〔Ⅱ〕

司式者 神かみと人ひととに仕つかえるためいに行いきましょう

会衆 主しゅのみ名なによって アーメン

ここで聖歌を用いてもよい。あるいは派遣の唱和の前に用いてもよい。

「日本聖公会第 56（定期）総会における礼拝委員会報告承認に基づき、一部修正の上、第 176 回（定期）主教会において、この式文の試用を承認する。さらに日本聖公会第 58（定期）総会における礼拝委員会報告（「み言葉の礼拝」式文一部改訂案）承認に基づき、第 195 回（定期）主教会において、この式文の一部修正を承認する。

2011 年 2 月 24 日

日本聖公会主教会